

衆院東北ブロックで日

本共産党初の2議席をめ

ざす、ふなやま由美比例

候補(52)。「医療・福祉

の専門家」として自民党

政治による社会保障破壊

とたたかい続け、「今こそ

公衆衛生向上、憲法25条

が全面的に保障、發揮さ

れる日本を」と挑みます。

公衆衛生向上今こそ



聴衆とグータッチでエール交換する、ふなやま候補=18日、山形市

「命を守る仕事につきたい」との思いを強めたのは、高校2年の夏、難病・筋ジストロフィーの父親が45歳で急死したときでした。

「命を守る仕事につきたい」との思いを強めたのは、高校2年の夏、難病・筋ジストロフィーの父親が45歳で急死したときでした。

■福祉守る論戦

前日の晩まで一緒にカレーライスを食べて元気だったのに、翌朝、布団の中で冷たくなっていました。ショックで涙が出ませんでした。火葬の日、障書を抱えて生きる苦しさで命の尊さを学んだ思いがこみ上げ、涙が止まりませんでした。

コロナ禍で体制強化が急務である保健所は、自民党が30年間で半減させ、人口100万人を超える仙台市に残ったのは1カ所だけ。「自助」押し付けを許さず、「憲法25条が明記して

いる『公衆衛生の向上と増進』は、社会保障とともに国の責任です」との、ふなやま氏の訴えが聴衆の心に響いています。

仙台市議時代(2003年当選、4期)に「命を守る」論戦を展開。保健所間

衆院東北ブロック初の2議席めざす

ふなやま 由美 比例候補

題では感染症対策を業務としない「支所」への格下げ(15年)に真っ向から反対し、「命と健康を守る最前線であり、体制強化こそ必要です」と迫りました。さらに議会で「灯油が高く、重ね着して寒さを我慢している」「お金がなく妊婦健診を受けられない」市民の痛みを代弁。灯油代助成、妊婦健診の助成拡充を実現させました。

市議を辞し、17年総選挙に初めて挑みます。「大本から政治を変えるため、今までやったことのない東北2議席が不可欠」。15年の安保法制Ⅱ戦争法強行、「命を最も粗末にする戦争」への怒りに大きく突き動かされました。

■感じた性差別

党県シエンター平等委員会責任者を務めるふなやま氏。宮城県丸森町の農家に生まれ、性差別の根深さも感じてきました。「母は農家の嫁」と世間体を気にし、子どもを産み育て早朝から夜遅くまで働き続けた。障書のあった父は「働いて家庭を支えるのが男の役目」と負い目があった」と振り返ります。

新規移住促進などの努力に水をさされました。「原発ゼロにしないと被災者が浮かばれない」と、力がこもります。

「みんなが人間らしく最後まで生きられる社会にしたい」。市議時代の11年に超党派の女性議員らと共同し、戸籍名のみ記載だった当選証書氏名への通称付記を実現し、「ふなやま」の通称が認められました。今度は野党共闘で選択的夫婦別姓制度の早期実現をど意気込みます。

17年総選挙での議席後退の悔しさをバネに、党を語る集い「ゆみ力フェ」を各地で開催。今年6月以降は61回開き、参加者は1000人を超えます。山形県の集いで派遣切りに遭った青年に出会いました。青年は党に相談して生活を立て直し、「自分と同じ思いを他人にさせたくない」と入党したことが忘れられませんでした。

■悔しさバネに

共闘できずなを深めた仙台の市民団体の役員は「親しみやすい人柄で、市民の声をよく聞いて受け止めてくれる。医療・福祉のみならず幅広く政策に強い」と厚い信頼を寄せます。「必ずバツをつけさせたい」歴史的総選挙に向け、ふなやま候補は力を込めて訴えます。「私たちの運動、汗と努力の結晶が今の市民と野党の共闘です。必ず政権交代を実現するため、共闘の発展に全力をあげてきた日本共産党の東北初の2議席を、何としてもかちとる」